

神奈川県藤沢市の完新統産イノシシ下顎臼歯化石について

大 島 光 春

Mitsuharu OSHIMA: A Fossil Lower Molar of
Wildboar (*Sus*; Mammal, Artiodactyla) from
Holocene Deposits, Fujisawa, Kanagawa Prefecture

はじめに

裂かや洞窟堆積物、遺跡以外からのイノシシ化石の産出例は非常に少ない。神奈川県では、完新統からのイノシシ化石の産出は、横須賀市久里浜の火力発電所敷地内からの頭骨一例のみが、*Sus cf. lydekkeri*として、報告されている (SHIKAMA & HASEGAWA, 1965)。この標本は、更新世のものと考えられていたが、¹⁴C法による年代測定の結果、8,250 ± 170yrs BP, 7,770 ± 120yrs BPとされた (蟹江・木越, 1985)。

小論は、藤沢市川名で、完新統大船貝層から発見された臼歯付き下顎骨片を、ニホンイノシシと同定し、報告する。

ORDER: ARTIODACTYLA

SUBORDER: SUINA

FAMILY: SUIDAE

GENUS: *SUS* LINNAEUS, 1758

Sus scrofa leucomystax TEMMINCK, 1842

原記載 TEMMINCK, 1842, *Siebold's Fauna Japon.*, Mamm. p. 6.

標 本

神奈川県立博物館標本番号 KPMG: 6496 (M₂₃付き左下顎骨破片)。

産出状況

採集年月日: 1969年 8月24日

採集位置: 神奈川県藤沢市川名1, 柏尾川左岸 (図1)

35° 19' 35" N, 139° 30' 05" E

松島・大嶋 (1974) によれば、本地点は復元された古大船湾の湾口部に位置する。

産出層: 完新統大船貝層

年代: 共産したハマグリ、ナミマガシワの¹⁴C法による

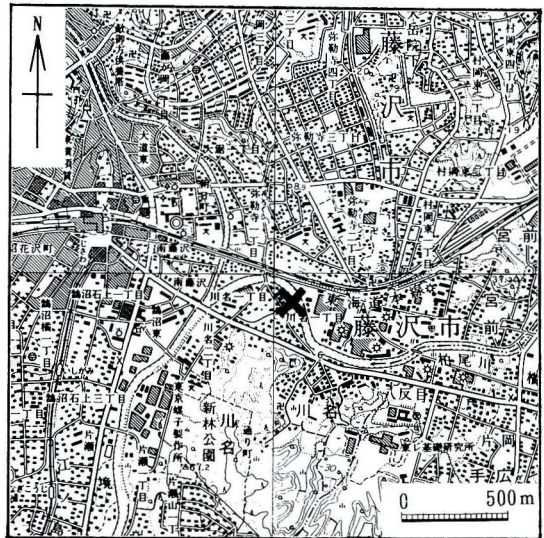


図1. 産出地位置図

(国土地理院1:25,000地形図, 戸塚, 鎌倉, 江の島, 藤沢より作成)

年代測定値は、5110 ± 140yrs BP (GaK-2544)である (松島・大嶋, 1974)。

共産化石: ヒゲクジラ (頭骨, 脊椎骨他), チョウセンハマグリ, イワガキ, イタボガキ, ハマグリ, シオフキ, イボキサゴ, マガキ, ハイガイ, イボウミナ他。

川名標本は、上記のような岩礫性群集, 内湾砂底群集, 干潟群集構成種の貝類に混じって産出した。その中で、岩礫性群集構成種には合弁のイワガキ, イタボガキ等が見られ、現地性を示す。一方、内湾砂底群集

表1. 川名標本の計測値 (mm)

長さ	73.2
幅	27.3
高さ	36.2

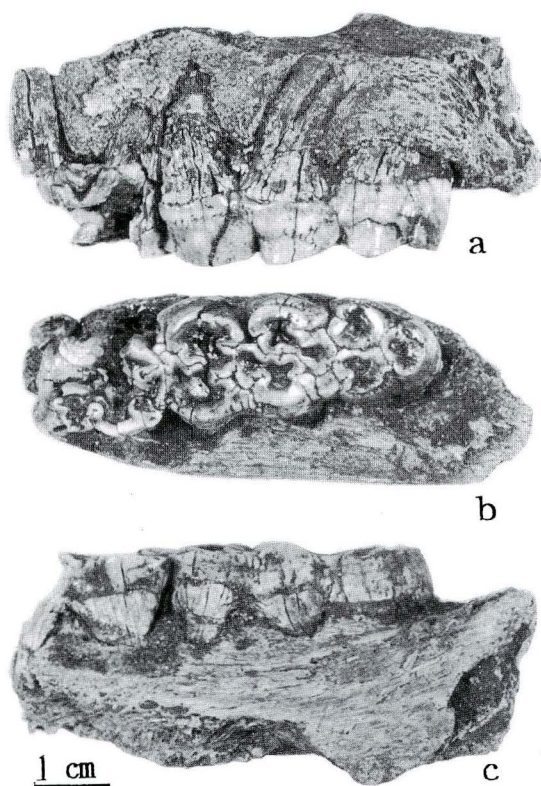


図2. *Sus scrofa leucomystax* TEMMINK
右下顎骨片およびM₂₋₃
a. 舌側, b. 咬合面, c. 頬側

や干潟群集構成種は、殻の保存状態が悪く、異地性堆積を示す。

記 載 (図2, 表1)

かなり咬耗しているが、エナメル質の褶曲が著しい鈍頭歯である。近遠心方向に長く、3列のlobeのある臼歯と、その近心に、遠心側だけが残っている保存の不完全な臼歯が、下顎骨の歯槽に埋まっている。ほぼ完全に保存されているのは、3列のlobeがあることと、これより遠心に歯槽がないことからM₃である。

下顎骨の腹側および舌側はほとんど失われており、舌側のほとんどと腹側の一部には、歯根が露出している。頬側も、歯根の歯茎に近い部分は露出しているが、

表2. イノシシの第三大臼歯の近遠心径と頬舌径 (mm)

	川名標本	長野県♀	東海地方♂	宮崎県♂	徳之島♂
近遠心径	37.4	34.6	35.5	34.2	27.3
頬舌径	18.5	16.1	16.0	12.8	13.6

* 徳之島のみ *Sus scrofa riukiuanus*

部分的に下顎骨の緻密質が保存されている。M₃の遠心側に下顎枝基部があり、下顎骨は頬側へ曲がっている。このことは、左顎であることを示す。

M₃は、主にプロトコニッド、メタコニッド、エントコニッド、ハイポコニッドの4つの主咬頭とタロニッドの3つの副咬頭からなり、これらが3列のlobeを形成している。また、第一lobeと第二lobeの間に2つ、第二lobeと第三lobeの間に1つ小咬頭がある。さらに、第二lobeと第三lobeの間の小咬頭の頬側と、プロトコニッドの近心にはアクセサリーがある。その他には顕著なアクセサリーや歯帯は見られない。M₃舌側の歯冠部には段差が見られるが、これはエナメル質の一部が磨耗したものである。

比 較

本州中部の現生 *Sus scrofa leucomystax* と比較すると、川名標本はタロンを構成するアクセサリーが少ない。しかし、この部分はイノシシの歯の中で最も個体変異が大きな部分であり、現生標本の中にも川名標本との違いを認められないものもある。計測値 (表2) からは、川名標本が現生標本より、やや大きいことが分かる。今のところ、比較できた標本が少ないので、はっきりしたことはいえないが、この時代のイノシシが全体に現生のものより大きかった可能性はある。しかし、表2を見る限り、川名標本と現生標本との差よりも、現生標本同志の地域差の方が大きいことも事実である。この様な、大きさのわずかな違いは、イノシシにおいては亜種が異なることを意味しない。よって、川名標本を *S. s. leucomystax* と同定した。

文 献

- 蟹江康光・木越邦彦, 1986. 横須賀市久里浜湾口産イノシシ化石のC年代. 横須賀市博物館報, (33): 3.
- SIKAMA, T. and Y. HASEGAWA, 1965. Fossil suid from Kurihama, Kanagawa. *Sci. Rept. Yokohama National Univ.*, Sec. 2, 12: 37-43, pls. 2-3.
- 松島義章・大嶋和雄, 1974. 縄文海進期における内湾の軟体動物群集. 第四紀研究, 13: 135-159.

(神奈川県立博物館)